

ナイジェリアの日本語教育とアブジャ大学の授業について

森田誠亮

アブジャ大学

1. 要旨

本稿は、2025年7月にマダガスカルで開催された第6回アフリカ日本語教育会議におけるナイジェリアの日本語教育事情についての報告である。特にアブジャ大学における日本語教育の現状、課題、そして今後の展望を中心に述べる。

2. ナイジェリアについて

ナイジェリアはアフリカ最大の人口を有する国であり、2023年時点で2億1670万人を数える。2050年には約4億1千万人に達し、インド、中国に次いで世界第3位の人口大国になると予想されている。国内には250以上の民族、500以上の言語が存在するが、公用語は英語、ハウサ語、ヨルバ語、イボ語である。また、GDPはアフリカ第1位であり、経済的にも重要な地位を占める。その一方で、2023年にティヌブ大統領が就任して以来、燃料補助費の廃止によりガソリン代が高騰、それに伴い物流が停滞、イン

フレ・物価高を引き起こし、庶民生活は困窮を極めている。そんな中、アフリカの富豪と名高いダンゴテ氏のダンゴテ財閥が製油所を開設し、ガソリン価格、物価の安定が期待されている。元々ボコ・ハラムによるテロ行為が問題になっていたのに加え、ほかの地域でも身代金を目的とした誘拐事件が頻発してしまっている。在日ナイジェリア人数は2020年12月時点で3315人、在留邦人数は2021年1月時点で145人と報告されている。

3. ナイジェリアの日本語教育について

報告者が赴任する以前の日本語教育については、『東アフリカ日本語教育会議論集』において言及されている。それによれば、2016年にNPO団体SWACIA（アフリカ女性子供を守る友の会）の長島日出子氏が、アブジャのSWACIA事務所およびファウンテン小学校において、約150人の小学生に日本語指導を行っていた。自主教材の作成も行っていたが、2017年にナイジェリアのビザが切れたため、ニューヨークに拠点を移すこととなった。その後もオンラインによる支援を続けていたが、現在は活動していない。

同時期の2016年には、国費留学により日本で博士号を取得したモハメド・ダウダ氏が日ナイジェリア同窓会を発足し、会長に就任した。その活

動の一環として、アブジャ大学に日本文化クラブを創設し、責任者には国費留学から帰国したばかりのアブジャ大学職員アセモタ氏とパトリック氏の2名が就任した。活動の一つとして、大使館員が週1回の日本語授業を実施しており、2017年には「Japan Day」と呼ばれる大規模な日本文化祭が開催された。

さらに2019年に開催された「Japan Day」では、新たにアブジャ大学副学長に就任したアブドゥルラシード・ナアッラー氏が、アブジャ大学において選択外国語科目を必修として導入し、その一つとして日本語を取り入れることを発表した。さらに、アブジャ大学では、また、2021年11月には、日本語日本文化研究所が設立され、報告者が臨時所長となって日本関連イベントの実施や日本語教育を行っている。

また、日ナイジェリア同窓会会長のモハメド・ダウダ氏が教鞭をとっているメイドゥグリ大学でも日本文化クラブ「NARUTO」が2024年に発足し、日本語教育は行われていないものの、参加学生が中心となって日本文化活動を行っている。

3.1 アブジャ大学の日本語教育について

アブジャ大学は、1988年1月1日にナイジェリア国内で初めて設立された

国立デュアルモード大学であり、従来型の教育プログラムと遠隔教育プログラムの双方を運営することが義務付けられている。同大学には9つの学部、健康科学部、補習校、遠隔学習センター、教育研究所、大学院などが設置されている。また、その地理的条件から多様な民族出身の学生が在籍しており、このことから「統一大学」とも呼ばれている。学生数は55,364人以上にのぼる。

3.1.1 必修選択外国語科目としての日本語教育 — GST Japanese 211/212

前述のとおり、2019年の「Japan Day」において必修外国語科目の導入が決定され、2020年より開講された。当時、報告者はエジプトからオンラインで授業を行う形でこれを支援していたが、2021年9月よりナイジェリアのアブジャ大学に赴任し、対面で日本語の授業を行う形となった。2020年における選択肢は日本語とアラビア語の2言語のみであったが、2000人以上の学生が日本語を履修していた。その後、2025年現在では、日本語、アラビア語、フランス語、ポルトガル語、スワヒリ語、スペイン語の6言語が導入されており、約400人の学生が日本語を選択し学んでいる。授業は週1回、2時間の授業を15週行い、これを2学期にわたって実施している。

3.1.2 日本語日本文化研究所の日本語教育

アブジャ大学日本語日本文化研究所は 2021 年 11 月に創設され、報告者を臨時所長として、GST Japanese 212 修了後に日本語学習を希望するアブジャ大学学生の日本語教育と大学外のナイジェリア人に対するオンライン日本語教育を実施している。前者は、主にスピーチ大会の指導や日本の大学生との交流授業などを不定期に行っている。一方後者は 1 週間に 2 時間の授業を 2 回、40 回の授業、80 時間を 1 期として行っている。こちらのコースには、ラゴスやイモ、イバダンなどアブジャ外からの日本語学習希望者が参加している。さらに、2023 年、2024 年は JICA からの要請により、ABE INITIATIVE 候補者の来日前日本語集中コースを実施している。2025 年はナイジェリアのみならず、ナイジェリア、コートジボワール、ブルキナファソ、セネガル、ベナン、モーリタニアの ABE INITIATIVE 候補者に対して実施した。

3.1.3 日本文化クラブの活動

上記の通り、2016 年よりアブジャ大学日本文化クラブが創設され、学生が自主的に日本関連の活動を行っている。年によって、活動は様々であるが日本語の授業を先輩の学生が後輩に行っていたこともある。2025 年現在

は、アニメの資料やサブカルチャー情報の共有などの活動が多いようである。報告者は経理責任者として関わっており、日本文化クラブで費用が必要な行事を行うときに大学に掛け合う役割を担っている。

3.1.4 アブジャ大学日本図書館

アブジャ大学における日本語教育以外の出来事として、アブジャ大学日本図書館の完成が挙げられる。元在ナイジェリア日本大使の松永一義氏、近畿大学の河崎絵美氏、AJINOMOTO、JICA Nigeria、Nippon 財団からの寄付や寄贈により、漫画や書籍、浴衣などが揃えられ、学生が日本文化に触れることのできる非常に貴重な場となっている。

4. 今後の課題

2024年7月で、上記のアブジャ大学副学長であり、報告者を強くサポートしてくださったアブドゥルラシード・ナアッラー氏の任期終了に伴い、報告者もナイジェリアを去ることとなったのだが、報告者以外に日本語教師はいないため、オンラインで日本語教育のサポートを続けている。授業の面では特に大きな問題はないが、日本文化祭や JICA Chair などのアブジャ大学における対面式の行事を行うのは難しく、現在のところ実施の目途がたっていない。現地のアブジャ大学スタッフ、在ナイジェリア日本大使館

員や JICA Nigeria 事務所の方々との連携をうまくとりながら、今後のナイジェリアにおける日本語教育や日本文化普及の形を模索していきたい。

参考文献・参考資料

https://www.jetro.go.jp/world/africa/ng/basic_01.html#block1 2025 年 7 月 16 日現在閲覧可能 JETRO

長島日出子(2018)「ナイジェリアにおける日本語教育 SWACIA の紹介」『第六回 東アフリカ日本語教育会議 論集』ケニア日本語教師会・マダガスカル日本語教師会編(2018)